

経営理念	誇れる野市中を、みんなの力で！ ～『分かった！』と言える授業を！『ほっ！』とできる学校を！』めざして～ Level Up More ◎「困難があっても希望を持ち、常に前向きで、明るく取り組む」 ～すべての価値判断は「子どものために」を合言葉に！～ ◎「子どもたちに学びを！ 保護者に安心を！ 教職員にやりがいをも！」 ～公教育としての責任と地域からの信頼～ ◎「東部地区」の拠点校としての自覚と牽引 ～『力のある学校』をめざして～
------	---

中期経営目標		短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価		改善策等
			達成状況	評価	考察	評価	
豊かな心	命の尊さを重んじ、自他を大切にす豊かな人間性の育成に努める。	①基本的な生活習慣の定着。(学校評価アンケート肯定群85%以上) 昨年度【 】	質問項目「早寝、早起き、朝ごはん等の基本的な生活習慣が身に付いている」の肯定群は、生徒82.0%[86.4]、保護者69.3%[75.4]で昨年度よりも下がっている。保健通信や掲示物を通してより良い生活リズムの確立に向けて発信を行ってきた。今後は再度、保健委員会を通して生徒が主体となる取組を行っていく必要がある。	B	昨年度より肯定的評価の割合が減少しているが、養護教諭を中心とした取組は評価できる。朝練で早期に登校するため、朝食を食べない生徒がいるかもしれない。生徒の肯定群と保護者の肯定群の割合にずれがあるので、そこを埋めていくような手立てが必要である。	B	養護教諭を中心とした生徒や保護者に対しての啓発の取組は今後も継続していく必要がある。それとともに、保健委員会の生徒から全体に早寝、早起き、朝ごはんの重要性について呼びかけるなどの、生徒を中心とした取組を充実させていくことが求められる。
		②不登校生徒や教室に入れないなどの課題のある生徒への支援を行い、その減少に努める。【不登校生徒15人以下(全校生徒の3%以下)に減少】	2学期末不登校生徒(20日以上)の欠席は、29人[28人]、千人当たりの不登校数は、56.2人[57.5人]であった。本年度もSC、SSWIについて、個別の支援会を行い、医療機関や森田村塾、保護者と連携しながら対応してきた。また、不登校担当教員や校内適応指導教室担当教員等の取組により、未然防止、初期対応、自立支援の手立てを行った。今後は生徒主体の授業づくりを推進するとともに、授業の中での適切な個別支援を充実させる必要がある。	B	不登校生徒数は増加しているが、千人当たりの不登校生徒数に着目すると、その数が減少している。森田村塾に、多くの先生方が生徒の様子を見に行っていることなど、支援が必要な生徒に対して先生方が非常にこまめに対応していることは大いに評価できる。	A	現在の不登校に対する考え方が、学校に登校するという結果を目標にするのではなく、生徒が自らの進路を主体的に捉え、社会的に自立することを目標にすることに変わっている。そこで不登校の人数を達成目標にするのではなく、不登校生徒への自立支援の手立て、新規不登校を生まない未然防止や初期対応の取組についての達成目標に改善していく必要がある。
		③自己肯定感を育む勇気づけや場の設定を積極的にを行い、自尊感情を高める。(継続調査 昨年度以上) 昨年度【 】	道徳意識調査の自尊感情の質問項目「自分には良いところがある」の肯定群は、83.0%[84.0%]と昨年度並みの値である。自己決定の場を与える。自己存在感を与える。共感的な人間関係を育む取組を継続していく必要があると考えている。	A	道徳の時間だけでなく、学校行事や学校生活を通じて生徒の自尊感情を高める手立てができています。今後も継続していく必要がある。	A	二者面談や合唱コンクールや体育祭などの生徒主体の行事運営など、今までの取組を継続、発展させて生徒の自己肯定感や自尊感情を高めていくことが大切である。
		④学級活動や生徒会活動を通して、コミュニケーション力や連帯感とともに、生徒の自治力を育成する。(学校評価アンケート80%以上) 昨年度【 】	質問項目「問題が起こった時に、みんなで話し合って解決することができる」の肯定群は84.7%[89.6]、「お互い良い所を認め合うことができる」の肯定群は、87.7%[93.3]という結果で、ともに昨年度より減少している。学級活動の中で、学級の課題解決に向けての話し合い活動を行い、自分たちの学級を自分たちで改善していく活動を充実させるとともに、生徒会活動を通して生徒の自治力を育成する必要がある。	B	評価項目の割合については昨年度より減少しているが、合唱コンクールや体育祭などの学校行事では、生徒が主体的に取り組んでいるところが素晴らしい。今後も継続していく取り組むことで、生徒の自治力が向上すると考えられる。	A	保健委員会や美化委員会などの専門委員会も積極的に活動している。学校行事等での生徒会の活動だけでなく、専門委員会での活動も評価項目に入れていく必要がある。
		⑤キャリア教育(進路指導の充実)を推進し、将来の夢や希望をもった生徒を育成する。(学校評価アンケート80%以上) 昨年度【 】	「目標や夢をもって学校生活を送っている」の質問項目の肯定群は80.4%[84.7]で、若干下がった。本年度より再開した職場体験学習や保育実習等の活動を実施することで、将来に対する見通しや希望を持たせることにつながるよう指導した。今後はキャリアパスポートを効果的に活用することで、夢や希望を持った生徒の育成につなげていきたい。	B	評価項目の割合については昨年度より減少しているが、コロナ禍ではできなかった職場体験や保育実習等の取り組みを再開したことについては一定の評価をすることができる。	B	職場体験や保育実習等の取り組みを継続していくことが大切である。また、キャリアパスポートについてはデータ化していつでも使えるようにするなど、効果的な活用方法を考えていく必要がある。
		⑥人権教育、道徳教育を充実、推進。(道徳意識調査の肯定的評価昨年以上)	道徳意識調査の「道徳の勉強は好きだ」の項目において肯定群は、91.4%[93.1]で高い数値となっている。全校での弁論大会とともに、学級・学年で人権発表を行ったほか、いじめに対する学習や情報モラルに関する学習など複数回実施できた。また、親子講演会(講師:宮田真先生)や生徒会活動でジェンダーについて考える場を設定するなど、生徒がジェンダー等の身近な人権問題を「自分事」として捉えられるよう工夫した。	A	道徳の授業改善や弁論大会、ジェンダーに対する取り組みなど、しっかりと道徳・人権について学習する機会を取ることができている。道徳意識調査の肯定群の割合は高いので、道徳の授業改善についても継続して取り組んで欲しい。	A	道徳科の学習を中心に、人権学習についても継続して取り組むことが大切である。ジェンダーの学習も継続して行い、生徒主体で制服の見直し等の議論も行っていく。
		⑦学校いじめ防止基本方針に乗っ取っていじめの早期発見や日常の生徒理解に努め、適切な情報共有や対応に努めている。(学校評価アンケート肯定群85%以上) 昨年度【 】	生徒理解に努めるため、校内支援会を年間6回、個別の支援会延べ50回(2学期末現在)行った。質問項目「学校は、子ども達、保護者、地域の意見を聞いてその声を活かしている」の肯定群は、保護者83.5%[73.0]、教員97.9%[83.3]と昨年度に比べ保護者と教員との開差が広がった。質問項目「学校は、家庭への連絡・情報提供を積極的に行っている」の肯定群は、保護者83.5%[84.5]、教員97.9%[90.0]となった。「すぐる」を活用して学校通信を配付したり、学級担任が積極的に学級通信を発行したりするなど、生徒の様子を伝えようと努力している。	A	生徒や保護者に寄り添った指導や、保護者との関係づくりについてもしっかりと取り組むことができていくと感じる。今後も継続していじめの早期発見や生徒理解に努めるとともに、保護者への情報発信を続けて欲しい。	A	校内支援会や個別の支援会を通して、生徒理解を深めたり保護者の不安を取り除いたりする取組を継続する。授業中や休み時間にも可能な限り生徒のそばで見守り、いじめにつながるような小さな芽を見逃さないようにするとともに、発生した際には組織的な対応で解決を測っていくようにする。

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	学校関係者評価				改善策等	
		達成状況	評価	考察	評価		
確かな学力	主体的・協働的な学びの育成～生徒一人一人が「分かる・できる」が実感できる学習活動をめざす～	①校内研修や教科会を活性化し、授業改善に組織的に取り組む。(教員アンケート肯定群90%以上)	授業スタンダードアンケートの質問項目「教科会での取組が授業改善につながっている」の肯定群93.3%、「課題解決に向けて、教科会として対応できている」の肯定群が83.4%である。教科会は週に1回、教科主任会は月1回実施している。授業力向上に向けて講師を招聘した校内研修も行われ、全教員で同じ方向を向いて、授業改善に取り組むことができつつある。今後は教科共通の取組を焦点化することで、教科会をさらに充実させていきたい。	B	教科会や校内研での学びにより、少しずつ授業改善が進んでいると感じている。また、一人一台端末を活用した授業が多くなり、新しい時代に対応した授業づくりができてはいると感じている。	B	学力向上PDCAサイクルを計画的に回していくことが大切である。年度当初にいつ、何を検証するのかしっかりと年間計画を立てて授業改善に取り組んでいく必要がある。また、主幹教諭と研究主任が連携して具体的な取組を提示し、教科横断的に授業改善していただくことが求められる。
		②授業に主体的に取り組むことで「分かった・できた」と達成感をもつ生徒が増えるであろう(研究仮説)〈教師の手立ての重点〉 ○自分の考えを説明したり、再構築したりする活動の充実 ○クロームブックの効果的な活用	重点取組に対する教員アンケートの質問項目「ペア・グループ等の学びの時間の後、再び個人で思考する時間が取れている」の肯定群は86.2%、「クロームブックを活用した効果的な学習ができている」の肯定群は69.0%である。教科会、教科主任会を通じて重点取組について定期的に検証を行うシステムを作り、取組の改善を行っている。クロームブックの効果的な活用については、徐々にではあるが、充実しはじめている。	B	アンケート結果を見ると、ペア・グループ後の個人志向をする時間の設定はよくできているが、クロームブックの活用はまだまだ充実させていく必要がある。	B	学力課題改善や新しい時代に必要な力の育成に向けて、研究主題や具体的な取組をしっかりと設定する必要がある。クロームブックの活用とともに、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現することが求められる。
		③組織的に授業規律の定着を図る。特にきく態度や規範意識を育成する。	「聴くコンテスト」を年間2回実施している。学習委員会でなぜ話を聞くことが大切かを話し合い発信できた。チャイム着席についても、教員だけでなく教科リーダーが呼びかけることでチャイム1分前着席が定着してきており、落ち着いて授業をスタートできるようになっている。年度途中に授業規律について教員間で意思統一を図り、生徒と教員が協力して授業規律の定着を図っている。	A	教科リーダーが中心となり、1分前着席が良くなってきている。1分前着席や聞くことに力を入れているので、生徒が落ち着いて授業に向かうことができています。生徒と教員が協力して授業規律徹底することができている。	A	小中連携の取り組みをさらに充実させ、チャイム着席や聞くことの充実を引き続き取り組むとともに、生徒と教員が協力していくことを継続していくと良い。
		④家庭学習の習慣化に努め、予習・復習の質と量を高める。(家庭学習1時間以上70%以上)	○平日の家庭学習の時間1時間以上(2学期調査65.0%) ○休日の家庭学習の時間1時間以上(2学期調査66.3%) 家庭学習の質と量の充実については、学力向上に向けた課題でとなっている。プロジェクトチームをつくり、家庭学習の新たな仕組みづくりや学習委員会の活動の充実を図ることで、家庭学習の質と量を充実させていきたい。	C	塾の時間は含まれていないので、塾の時間を入れるともう少し長くなると思うが、家庭学習の時間の少なさは大きな課題であると考えられる。学力定着に向けて、工夫した取組が求められる。	C	家庭学習の新たな仕組みづくりや生徒主体の活動の充実を図る必要がある。アンケート調査は、塾で勉強する時間も含めて聞くようにすると、学校以外での勉強時間が分かるかと考える。
		⑤複数教員による教科指導や少人数学習の効果的な活用や、個に応じた支援を行う。(学校評価アンケート80%以上) 昨年度【 】	授業理解に関する質問項目の肯定群は、生徒85.1%【90.1】保護者45.7%【66.0】教員65.5%【70.2】であった。生徒、保護者、教員で、ばらつきがある。加配教員や学習支援員による個に応じた支援を充実させる必要がある。	A	加配教員や学習支援員が配慮が必要な生徒に個別に声をかけたり、デジタルドリルを活用するなど、個に応じた支援は充実していると考えられる。	A	TTや少人数学習を継続するとともに、授業の中で個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることにより、個々の興味関心に則した学びを提供する必要がある。
信頼される学校	保護者や地域に開かれた学校づくりに努め、信頼される学校を確立する。	①予防的な視点での生徒指導に努め、落ち着いた学校を維持する。(暴力行為の発生件数10件以下)昨年度【 】	2学期末の生徒間暴力の発生件数は0件【0件】である。落ち着いた学校を維持することができている。	A	生徒間暴力は0を継続している。これまでの取組の成果と考えられる。	A	発達支持的生徒指導を基盤とし、課題の未然防止教育を充実させるとともに、生徒の自己指導能力を育成していく。
		②地域学校協働本部を立ち上げ、具体的な活動に取り組む。	放課後学習支援は、1月末現在13名(1年4名、2年5名、3年4名)の参加者で計画通り実施している。支援員の先生方が丁寧に指導してくれている。12月学校周辺環境整備を人権擁護委員と連携して実施することができた。また、卒業式前に花壇整備等計画している。	B	放課後学習支援や環境整備など、取組が定着してきている。今後も地域と学校が互いにメリットが有るような活動に発展させてほしい。	B	地域人材を掘り起こしたり、地域の活動に参加する場年を作ったりして、地域学校協働本部の活動を充実させていく。防災学習を地域人材とともに行うことができると良い。
		③保護者や地域へ学校の情報を積極的に発信する。(学校評価アンケート80%以上) 昨年度【 】	「学校が保護者や地域へ情報提供をしている」についての質問項目の肯定群は保護者81.1%【83.5】、教員97.9%【97.9】となり、目標値は達成した。「すぐー」を活用して学校通信を周知したり、学級担任が積極的に学級通信を発行するなど、生徒の様子を伝えようと努力している。	A	学級通信や学校通信をこまめに発行している。学校の取組を保護者、地域に伝えていくことが信頼関係を構築することにつながる。	A	「すぐー」を利用して、保護者に向けて学校からの情報発信をさらに進めていくとともに、学校ホームページ等を活用して地域に対しても情報発信を行っていく。
		④学校評価を実施し、学校運営の改善に努める。(学校評価アンケート「意見を聞いてその声を生かしている」70%以上) 昨年度【 】	1月に学校評価を実施する。評議委員の評価とご意見を次年度にいかしていく。「保護者や地域の声を活かしている」の質問項目について保護者83.5%【73.0】、教員96.6%【83.3】と、昨年度に比べそれぞれ評価が上がっている。	B	アンケートの肯定的な回答の割合が増加している。学校運営の改善に努めていると評価することができる。	A	生徒や保護者、地域の声を学校運営に反映できるよう、学校評価アンケートの項目を見直したり、回答内容から取組を見直したりしていく。
		⑤安心・安全な学校づくりを進める。	学校安全計画を踏まえ、教職員と共有を図りながら、危機管理に努めてきた。自転車の乗り方については、地域の方から注意を受けるなど課題となっている。避難訓練や救急救命講習については予定通り行い、教科の学習を通じて、防災についても学習している。	B	避難訓練や防災学習など、学校安全計画を踏まえ、危機管理に努めていることは評価できる。自転車でスピードを出しすぎていたり、ヘルメットをかぶってなかったりする場面が見られるのが心配である。	B	自転車の乗り方については、交通安全教室を実施したり、地域や保護者と連携したりして、継続的に指導を行っていく。総合的な学習の時間に地域の人と防災学習に取り組むなど、さらに安全教育の充実を図っていく。

評価基準

A:十分満足 (80%以上)
C:もう少し努力すべき(60%～40%)

B:おおむね満足 (80%～60%)
D:大いに努力が必要 (40%以下)